

## 新カリキュラム・看護の統合と実践

国試対策は看護実践力をつける総仕上げ 問題をときながら看護の面白さを知る

(医学書院・看護教育 第49巻 第4号 別冊より)

私の年間の講義の大半は予備校、あるいは学校に出向いての国家試験対策講義である。

国家試験の勉強を進めていくと、学生達からは『先生の講義を聞いてから実習に出たかった。』『今なら根拠がわかるから自信を持って看護できると思う。』『今は早く臨床に出たいと思える。』など、また既卒生からは、『負け惜しみではなく、落ちて良かった。もしあのまま受かって臨床に立っていたらと思うと怖い。』等の言葉が多く寄せられるのである。カリキュラムに添った学業、学内演習を一通り終え、臨地実習を通じて学びを深めてから、国家試験対策の勉強に突入してくるはずなのに、『学んできた知識と看護が結びつかない学生が多いなあ・・・』と、そんな印象を毎年受けるのである。また国家試験に合格して臨床に出た人達が『勉強不足で自信を持った看護ができない』と受講してくる。国家試験対策の講義を通して、それまで部分毎には吸収できていた知識が統合できたとき、学生達は『わかった！ 見えた！』とうれしそうな表情をするのである。これらの経験から、統合学習は机上の学習でも充分トレーニングする事が可能であると思われる。

**私が行う国家試験対策は循環器系、呼吸器系など系統別に、まずは解剖生理学についてしっかり復習した上で、特に正常な生理機能について徹底的に理解を図っていく。**そうすることでその学習が看護の力を養成する総仕上げとなるからに他なるまい。

**例えば、今回の事例を国家試験対策として使う場合、血液の生理機能から復習を始める。まず血球と血漿と血清について正しく認識させた上で、血球なら赤血球・白血球・血小板の生理機能について復習する。さらに白血球については、顆粒球と無顆粒球について、顆粒球では好中球・好酸球・好塩基球それぞれについて、また無顆粒球ではリンパ球(T細胞・B細胞・NK細胞など)と単球(マクロファージ)についてしっかり押さえておく。多くのテキストが血液と生体防御を章を分けて説明しているが、国家試験対策では血液を勉強するときに、液性免疫と細胞性免疫のしくみなどを含め、感染防御システムをしっかり理解させるために同時にやってしまう。その上で事例に戻ってアセスメントし、具体的な看護実践の力へとつなげていく。**

今回の出題について、私は最終仕上げの問題として提案している。

1. 化学療法に伴う副作用症状を考えたときの実施のポイントは何でしょうか。

清拭・口腔ケア・鼻腔ケア・外陰部ケア・頭部ケア・部分浴・寝衣交換・寝具調整などについて考えてみましょう。

白血球減少症(顆粒球減少)に伴う易感染症を考えたとき

例えばこれについて実際の講義の一例を紹介すると、『好中球はセコム（セキュリティ）だよ。建物に設置されていれば、日々部外者の侵入を見張っているでしょ。窓やドアにたくさんセンサーが設置されている建物は侵入が難しくなるし、逆に見張りが少なければ侵入しやすいでしょ？ だから好中球は易感染の程度の指標になるんだね。』という話をしながら、しっかり血球それぞれの知識をイメージさせておく。そして、白血病についての病態を勉強し、薬理の面から抗がん剤には副作用として骨髄抑制や好中球減少症が生じやすいことを押さえると、疾患からも薬の副作用からも易感染という問題点とスムーズに結びつく。口腔内の常在菌にさえ感染してしまうというメカニズムがわかり、いかに感染予防看護が重要かと認識してくれるので、学生からは『唾液の中の見張り（自浄作用）もないから口腔粘膜の観察が大事だし、呼吸器感染につなげてはいけないから口腔ケアが大事ですね。』と返ってくるようになる。文字媒体だけの事例からも、知識に裏付けされた看護技術が理解でき、自信が付くことが看護の楽しさにつながっていく様子が見える。すると易感染状態の患者の口腔ケアと、食欲を高めるための口腔ケアとではいかに目的が異なるか、臨床では毎日数回実施する口腔ケアひとつにも、わかって行うケアを身につけようとする姿勢が変わる。それがプロの仕事だよとメッセージを送り続ける事で、確実な知識と理論に基づく看護展開の重要性や楽しさを知ってくれるようだ。このような日々の経験から、統合力を筆記試験で問う事になんの異論もないどころか、まさしく学生達はこの勉強を通して看護の楽しさを身につけていくことであろう。

生理機能をきちんと理解していれば、『疾患の問題点はここである、だから看護はここがポイント、この点をふまえた技術の提供』という統合力を身につける学び方が実践力の養成につながることはもちろんだが、1人1人の学生が、何より自信を持って看護に臨めるようになると信じている。新人看護師の離職理由のトップが自信のなさであることを考えると、この辺りの教育の重要性は一段と高いといえるだろう。このような視点から、看護技術を通して統合性を高めることが、より臨床に直結した学びとなるはずだし、問題を解きながら看護のおもしろさを知って欲しいとの思いで質問の方向付けをした。自信を持って清拭ができるというのはどういうことなのか、患者の状態を把握し、理論に基づいた看護を実施しようとする事は、そのまま技術を高めることにも自然とつながるはずである。看護の統合力を問う問題をたくさん解くことが、看護学生としての学習の総仕上げになる事は間違いないし、この学び方さえわかれば、どの現場に行ってもポイントを外すことなく、看護の実践力を高めていけるだろうと信じている。（一部抜粋）